

日蓮大聖人御書全集

むしもちごしよ

十字御書

新版
2036
ゝ
2037

むしもちごしよ

十字御書

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

いしかわよしすけ

つま

弘安 4 年 ('81)

1 月 5 日

60 歳

石河能助の妻

むしもちいつぴやく 枚

菓子 一 籠

た お

十字 一百まい・かしひとこ、給び了わんぬ。

しょうがつ ついたち

ひ 始

つき はじ

年

始

正月の一日は、日のはじめ、月のはじめ、としのはじめ、

はる はじ

ひと

つき にし

ひがし

指

満

春の始め。これをもてなす人は、月の西より東をさしてみ

ひ ひがし

にし

渡

明

つがごとく、日の東より西へわたりてあきらかなるがごと

徳

勝

ひと

愛

そうろう

く、とくもまさり、人にもあいせられ候なり。

じごく

ほとけ

ところ

そうろう

尋

そもそも地獄と仏とはいずれの所に候ぞとたずね

そうろう

ち

した

もう

きよう

さいほうとう

候えば、あるいは地の下と申す経もあり、あるいは西方等

もう きよう そうろう

いさい そうら

われ

と申す経も候。しかれども、委細にたずね候えば、我ら

ごしやく み うち そうろう 見 そうろう

が五尺の身の内に候とみえて候。

覚 そうろう われ こころ うち ちち 悔

さもやおぼえ候ことは、我らが心の内に父をあなずり

はは 疎 ひと じごく ひと こころ うち そうろう たと

母をおろかにする人は、地獄その人の心の内に候。譬え

はちす 種 なか はな み 見 ほとけ もう

ば、蓮のたねの中に華と菓とのみゆるがごとし。仏と申す

われ こころ うち たと いし なか ひ

ことも、我らが心の内におわします。譬えば、石の中に火

たま なか たから われ ぼんぷ 睫

あり、珠の中に財のあるがごとし。我ら凡夫は、まつげの

近 こころ 遠 み そうろう われ こころ うち

ちかきと虚空のとおきとは見候ことなし。我らが心の内

ほとけ し そうら

に仏はおわしましけるを知り候わざりけるぞ。

うたが

われ

ふぼ

しょうけつへん

ひと

ただし、疑いあることは、「我らは父母の精血変じて人

そうら

さんどく

こんぼん

いんよく

みなもと

となりて候えば、三毒の根本、姪欲の源なり。いかでか

ほとけ

たも

うたが

そうら

打

返

仏はわたらせ給うべき」と疑い候えども、またうちかえ

打

返

あん

そうら

謂

覚

そうろう

しうちかえし案じ候えば、「そのゆわれもや」とおぼえ候。

はちす

清

どろ

出

梅

檀

香

蓮はきよきもの、泥よりいでたり。せんだんはこうばし

もの

だいち

生

桜

もの

き

なか

き物、大地よりおいたり。さくらはおもしろき物、木の中よ

咲

出

楊

貴

妃

み

げじよ

腹

生

りさきいず。ようきは見めよきもの、下女のはらよりむま

つき

やま

出

やま

照

れたり。月は山よりいでて山をてらす。

禍

くち

い

み

破

幸

こころ

わざわいは口より出でて身をやぶる。さいわいは心より

出 われ 飾
いでて我をかざる。

いま しょうがつ はじ ほけきよう 供 養 思

今、正月の始めに法華經をくようしまいらせんとおぼし

みこころ き はな 咲 いけ はちす 薔 せつせん

めす御心は、木より花のさき、池より蓮のつぼみ、雪山の

梅 檀 開 つき はじ い

せんだんのひらけ、月の始めて出ずるなるべし。

いま にほんこく ほけきよう 敵 禍 せんり

今、日本国の、法華經をかたきとして、わざわいを千里の

そと 招 い 思 いま

外よりまねき出だせり。これをもつておもうに、今また

ほけきよう しん ひと 幸 ばんり そと 集

法華經を信ずる人は、さいわいを万里の外よりあつむべし。

かげ たい しょう ほけきよう 敵 ひと くに

影は体より生ずるもの。法華經をかたきとする人の国は、

たい 影 添 禍 きた ほけきよう しん

体にかげのそうがごとくわざわい来るべし。法華經を信ず

ひと

梅

檀

香

具

る人は、せんだんにこうばしさのそなえたるがごとし。またまた申し候べし。

もう

そうろう

しょうがついつか

正月五日

にちれん

日蓮

かおう

花押

重

須

殿

にようぼうごへんじ

おもんすどのの女房御返事